

《伝記物語》の変容（その4）

——『フロリヤンとフロレット』をめぐって——

La métamorphose du roman biographique n. 4 :
le cas de *Floriant et Florete*

渡 邊 浩 司

要 旨

13世紀後半に成立したと推測される、古フランス語韻文による作者不詳の『フロリヤンとフロレット』は、シチリア王子として生まれたフロリヤンが数々の冒険を経て王位を奪還する物語であり、「伝記物語」の系譜に属する。この物語には複数のジャンルにまたがる先行作品群からの影響が認められるが、本稿では「アーサー王物語」のうちクレティアン・ド・トロワの作品群および、「聖杯物語群」の中核を占める『ランスロ本伝』の冒頭との比較を通じて、『フロリヤンとフロレット』の作者が行った筋書き・テーマ・モチーフの借用と独自の改変について検討する。

キーワード

アーサー王物語, 伝記物語, 『フロリヤンとフロレット』,
クレティアン・ド・トロワ, 聖杯物語群

1. はじめに

12世紀中頃にフランス語圏で誕生した「アーサー王物語」は、ヨーロッパのさまざまな言語で書き継がれて重要な文学ジャンルとなり、15世紀にはトマス・マロリーが中英語の長編作品により集大成した。約300年の間に蓄積された膨大なアーサー王物語群の中で、量的にも質的にも比類なき

豊かさを誇っているのが、中世フランス語の韻文および散文で書かれた作品群である¹⁾。

このうちクレティアン・ド・トロワ（従来の表記ではクレチアン・ド・トロワ）²⁾以降に書かれた数多くの物語の中では、マロリーの主要な典拠となった中世フランス語散文による「聖杯物語群」の研究が精力的に進められてきた。一方で、これまでしかるべき評価がなされてこなかった作品群が存在する。その典型例が12世紀後半から13世紀後半に中世フランス語韻文で書かれた作品群であり、多くは比較的最近までクレティアン・ド・トロワの「エピゴーネン」、つまり独創性のない模倣者（追隨者、亜流）とみなされてきた。このうちこれまで拙稿の主な分析対象としてきたのは、ガストン・パリスがかつて「伝記物語」と名づけたジャンルに属する作品群である。

「伝記物語」とは「1人の主人公の誕生から、あるいは少なくともアーサー王宮廷への出現から物語を始め、その宮廷で物語の主題となるべき冒険が主人公に課され、主人公の武勇を多少とも長々と語り、最後には主人公の結婚に至るもの」³⁾である。このジャンルに属する作品群のうち、ギヨーム・ル・クレール作『フェルギュス』⁴⁾、作者不詳『グリグロワ』⁵⁾、ルノー・ド・ボージュ作『名無しの美丈夫』⁶⁾、作者不詳『イデール』⁷⁾、ラウル・ド・ウーダン作『メロージス・ド・ポールレゲ』⁸⁾、作者不詳『双剣の騎士』⁹⁾、ロベール・ド・プロワ作『ボードゥー』¹⁰⁾については、これまでに紹介・分析する機会を得た。本稿では、作者不詳の『フロリヤンとフロレット』（以下では『フロリヤン』と略記）¹¹⁾を取り上げる。

『フロリヤン』についての基本的な情報（写本、推定創作年代、作者と時代背景など）については、『フロリヤン』における妖精モルガーンを扱った別稿¹²⁾ですでに整理して紹介した。キース・バズビーが1995年の論考¹³⁾で述べているように、『フロリヤン』は20世紀末まで「完全に忘れ去られたかのように」、アーサー王物語研究者の興味を引くことがなく、今もその

状況はあまり変わっていない。クレティアン・ド・トロワの現存第2作『クリジェス』のように地中海世界を主な舞台とし、アーサー王世界が後景に追いやられていることや、「武勲詩」「古代物語」「冒険物語」といった別のジャンルの要素が混在していることが、『フロリヤン』の否定的な評価を招いてきたのかもしれない。

本稿では『フロリヤン』の作者が、先行作品群から行った筋書き・テーマ・モチーフの借用と独自の改変について検討する。なお対象となる先行作品群は複数のジャンルにまたがっているため、ここでは『フロリヤン』との比較の対象を「アーサー王物語」の中でもクレティアン・ド・トロワの作品群と、「聖杯物語群」の中核を占める『ランスロ本伝』の冒頭に限定することにした。

2. 『フロリヤン』の筋書き

まずは『フロリヤン』の筋書きを詳細にたどることから始めよう。『フロリヤン』は8278行からなる、1行が8音節詩句で書かれた韻文物語である¹⁴⁾。便宜上エピソード区分を行い、それぞれに小見出しをつけた。

(1) プロローグ (v. 1-32)

語り手は韻文作品を書くことの難しさに触れながら、「愛の神」と意中の女性に助けを求めて物語を開始する。

(2) エリヤデウス王の暗殺と王妃の逃亡 (v. 33-735)

かつてシチリアには賢明で勇敢なエリヤデウス王がおり、クローヴグリ王の美しい娘を妻に迎えていたが、長らく子宝に恵まれなかった。しかしある年の5月、2人は庭で悦楽に浸り、王妃が懐妊する。王妃を狂おしく愛していた王の家令マラゴは、クリスマスの宴の後、王一同が席を離れたときに王妃へ恋心を伝えるが、すげなく断られてしまう。そのためマラゴ

は、エリヤデウス王が始めた森での雄鹿狩りのさなかに、王を暗殺してしまう。

葬儀から3日後に王妃が諸侯を集めると、マラゴは諸侯の総意として国防という大義を振りかざし、寡婦となった王妃に結婚を提案する。妊娠中だった王妃は、出産のため復活祭までの猶予を諸侯に求めて認められる。その直後に王妃は、忠臣オメールの助言に従い、彼の居城モンレアルへ向かう。旅の途中、深い森に立ち寄ったある夜、王妃は息子を出産する。そこへアーサー王の姉妹モルガースが仲間の2人の妖精と一緒にやってきて、見つけた赤子を奪ってモンジベルへ連れていく。そして教会で洗礼を受けた赤子をフロリヤンと名づけ、かいがいしく世話する。息子をさらわれた王妃は悲しみに暮れながらも、オメールと一緒にモンレアルにたどり着く。

4月の復活祭に、マラゴはパレルモに諸侯を集めて意見を求め、モンレアルに籠城した王妃を呼び出してその意図を聞き出すことにした。諸侯が送り出した伝令に、王妃は家令マラゴが裏切って彼女の領土を奪ったことを非難する伝言を委ねる。伝令から話を聞いたうえで諸侯は、マラゴを新王に選出する。マラゴが王妃を奪い返すため2週間後にモンレアルへ向かう決意を述べると、諸侯はそれに同意する。

(3) フロリヤンの幼少年期と魔法の舟 (v. 736-930)

フロリヤンはモンジベルで、立派に成長した。7歳になると、モルガースが選んだ先生から、自由学科(7科)のほかにチェスや狩猟などの貴族にふさわしい教育をすべて受け、8年間で教養を身につける。

フロリヤンが15歳になると、モルガースは王と王妃の子であることを彼に明かす。そして彼を騎士に叙任し、命ずれば望み通りに航行する魔法の舟を授け、彼女の兄弟アーサー王のもとへたどり着く前に一連の冒険を経験することになると告げる。魔法の舟の内部は、四方がそれぞれ異なる見

事な壁掛けで覆われていた。フロリヤンが乗った舟は、モンジベルを離れると、日夜まっすぐに進んでいく。

(4) フロリヤンと騎士モラダスとの戦い (v. 931-1255)

フロリヤンが最初に立ち寄ったのは、アーサー王に敵対する残忍な騎士モラダスの居城だった。モラダスはアーサー王の騎士15人を幽閉していた。フロリヤンが自分の育ての母はアーサー王の姉妹モルガースであると述べ、決闘が始まる。長い激戦の末にフロリヤンは勝利し、モラダスが助命を乞い、幽閉中の騎士15人を解放する。翌日、フロリヤンは「舟を率いる騎士」¹⁵⁾と名乗り、モラダスに15人の騎士とともにアーサー王宮廷へ行くように命じる。フロリヤンは再び舟に乗り、モラダスはアーサー王が宮廷を開くカラディガンへ向かう。時はキリスト昇天祭の頃で、幽閉された15人の騎士の身の上を心配していたアーサーのもとにモラダス一行が到着し、喜んだアーサー王は見知らぬ恩人に感謝する。

(5) 「美しい乙女たちの島」での冒険 (v. 1256-1630)

次にフロリヤンの舟がたどり着いたのは美しい乙女たちの町で、4人の乙女が宮殿から出てきて彼を迎える。宮殿には千人以上の貴婦人がいた。アルマンディーヌという名の女性が「美しい乙女たちの島」の女王で、町は「白い町」と呼ばれていた。フロリヤンは宮殿で豪華なもてなしを受ける。

翌日、フロリヤンは王妃から、恐るべき獣が毎日娘1人を生贄として求め、貪り食っていることを知る。この混成獣は、すでに20人以上の騎士を食っていた。「ペリカン」という名のこの獣を倒した後、フロリヤンは王妃から求婚されるが、父の名を知るまで結婚するつもりはないと伝える。フロリヤンは王妃がアーサー王の宮廷へ行くことを求め、自らは再び舟に乗る。

王妃は20人の乙女を連れてカラディガンのアーサー王宮廷に向かう。そ

れは聖霊降臨祭の頃で、アーサー王が食事前に冒険譚を聞きたいと思って
いたところ、女王一行が到着して「舟を率いる騎士」による混成獣退治の
話をする。アーサー王がその騎士との出会いを望むと、ゴーヴァンの提案
により馬上槍試合の開催が決まる。

(6) 2人の巨人との戦い (v. 1631-1742)

フロリヤンは5月のある月曜に、ある島に降り立った。その島には荒廃
した城があり、3姉妹が暮らしていた。長女によると、その城は2人の巨
人のもので、国中を荒らしまわり、公爵だった3姉妹の父を殺害したのだ
という。棍棒を手にとってきた2人の巨人をフロリヤンは倒し、舟で娘た
ちをアーサー王宮廷まで案内することに決める。

(7) 編んだ髪を集める騎士との戦い (v. 1743-2017)

翌日、フロリヤンは素晴らしい城を見つけ、そのふもとに着岸する。す
ると城から出てきた騎士が、通行税として乙女たちの編んだ髪を渡すよう
求める。激戦の末に敗れた城主は、この慣例を始めた理由を明かす。彼の
意中の貴婦人が、編んだ髪を多くの女性から切り取って天幕を作るまで彼
を愛することはなく、しかも遍歴騎士に守られた女性の編んだ髪に限ると
のことだった。城主はそれまでに300人以上の女性から編んだ髪を切り、
倒した300人以上の騎士を城に幽閉していた。

フロリヤンは、助命を乞うた城主に囚人たちを解放したうえで一緒に
アーサー王宮廷へ行くよう命じる。そして自らは3姉妹とともに舟で漕ぎ
出す。城主は担架で運ばれ、解放した騎士たちとともにカラディガンに到
着し、アーサー王に冒険の報告をする。

(8) 馬上槍試合 (v. 2018-2615)

フロリヤンの次の寄港地は、アーサー王に仕える騎士が所有する城の近
くだった。森番であったこの城主は、3人姉妹を連れてきた人が噂の「舟
を率いる騎士」だと知って喜び、アーサー王が開催する馬上槍試合への参

加を勧める。城へ案内されたフロリヤンが外を見ると舟が遠ざかっていくのが見え、それがモルガーヌの意思によるものと悟る。

翌日、フロリヤンは城主からもらった白い甲冑をまとい、近習となった城主が2人の息子とともにフロリヤンに同行する。フロリヤンは城主夫人に、馬上槍試合が終わる頃、3姉妹を王妃のもとへ連れていくよう頼む。

フロリヤンが戦いの場につくと、すでに騎士たちは臨戦態勢にあった。参加者が二手に分かれて一方に円卓騎士団が陣取っていたため、フロリヤンは劣勢が予想されるもう一方の側につく。フロリヤンはクウ、サゲルモール、カドールを順に落馬させ、こうして10人の騎士を同じ目にあわせる。その間に、先に担架で運ばれてきた騎士が大広間の窓から「白騎士」の身もとに気づき王妃に伝えていた。その後もフロリヤンが武勇を重ねたため、王妃から頼まれたゴーヴァンがアーサー王のもとへ行き、「白騎士」が噂の「舟を率いる騎士」だと伝える。こうしてアーサー王は試合を終わらせ、フロリヤンとの対面を喜び、ゴーヴァンにフロリヤンの世話を任せる。

アーサー王と王妃の隣にフロリヤンが座ると、森番の妻が3姉妹を連れてくる。カレドニー（スコットランド）で暮らしていた3姉妹を、2人の巨人から救出したのがフロリヤンだった。宴が始まった頃、モルガーヌの使者を乗せた舟が到着し、フロリヤンに手紙を渡すとすぐに舟で帰っていく。フロリヤンが宮廷の人々の前でモルガーヌの手紙を読み上げると、彼がシチリアを支配していたエリヤデウス王の息子であり、王が王妃を愛する家令マラゴによって暗殺されたこと、王妃がモンレアルで兵糧攻めにあっていることが分かる。モルガーヌは手紙の最後で、フロリヤンによる亡き父の仇討ちと母の救出を求めている。涙するフロリヤンにアーサー王と宮廷の人々は救援を約束する。語り手はここで、美德に満ち溢れたアーサー王の時代との対比により、退廃してしまった今の世の中を嘆く。

(9) 船団の航行 (v. 2616-2745)

アーサー王は臣下に向けて、2月末にロンドンへ集結するよう命じる。フロリヤンはアーサー王のもとに留まり、冬の終わりまでに船を準備する。こうして2月、ロンドンに船団が集結する。オルカニーのロット王（ゴーヴァンの父）の軍やユリアン王（イヴァンの父）の軍など、22人の王と50人の伯爵と80人の公爵が集まった。

船団がロンドンの港を出ると、空はこの世の終わりであるかのように暗くなる。15日の間、船旅は問題なく進む。しかし16日目に船団は嵐に襲われ、未開の地へ運ばれていく。そこで約50人の近習が食糧を探しに向かうが、「サルデュイナ」¹⁶⁾と呼ばれるその土地の怪物に食べられてしまう。フロリヤンは下船を望んだが、仲間に引き留められ、一行は再び出発する。

(10) アーサー軍と皇帝軍の最初の戦い (v. 2746-3358)

モンリアルでは、マラゴによる攻囲が15年にも及び、王妃の留まる城の食糧は尽きかけていた。こうした中で、プルターニュからきたパレルモ生まれの商人たちがマラゴ王へ挨拶に行き、アーサー王がマラゴ王をシチリアから追い出すために10万の兵を連れてくるという知らせをもたらす。そこでマラゴはコンスタンティノーブル皇帝フィリメニスに伝令を送り、助力を求める。それと引き替えに、マラゴは皇帝の臣下になって貢物を払うと約束する。

皇帝はマラゴに援助を確約し、アテナ、アンティオキア、トルコ、インド、アルメニア、アフリカ、ティベリアなど各地から臣下を集める。大規模な船団が整うと、皇帝は娘のフロレットを伴って船出する（語り手はここで美しいフロレットの肖像を詳細に描いている）。この間、マラゴ軍へ送りこんでいた王妃のスパイが城へ戻り、アーサー王軍の到着と、マラゴが皇帝に援助を求めた話を王妃に伝える。

皇帝の船団がモンリアルに到着し、マラゴは皇帝フィリメニスに謁見し

て臣従の誓いを行う。皇帝は臣下たちを集め、戦略について相談する。そしてマラゴの意見に従い、アーサー王の船団が着岸する前に戦いを仕掛けることに決める。皇帝は軍団を10の部隊に分け、岸辺に迫ってきたブルトン人の軍に攻撃を始め、双方で激しい戦いが始まる。

フロリヤンは向かうところ敵なしだったが、あるとき天幕から出たフロレットの姿を認め、その美しさに動揺する。2人は名乗りあい、フロリヤンが話を続けようとしたが、そこへゴーヴァンらがやってきたため、フロリヤンは再び前線へ戻る。夜になり、双方が自陣へ戻ったため、皇帝軍はなんとか敗戦を免れる。

(11) アーサー王の軍と皇帝軍の2度目の戦い (v. 3359-4000)

皇帝は重臣たちを集め、今後の戦略を練る。マラゴがパレルモへ行行って守りを固めることを提案し、一行はパレルモへ移動する。城の一室に案内されたフロレットは、「愛の神」の攻撃を受けてフロリヤンへの恋心を抱くが、「知恵の神」から父の敵対者を愛するのは間違ったことだと諭される。フロレットは自分の名とフロリヤンの名との類似にも思い至る。フロリヤンも一晩中、皇帝の娘を想いながら苦しむ。

翌日になり、皇帝軍の逃亡を知ったアーサーの軍は喜びに沸く。王妃はオメールを伴って、モンレアルからアーサー王のもとへお礼に向かう。フロリヤンは、誕生以来一度も会うことのなかった母との対面を果たす。そして誕生後にモルガースにさらわれたが、立派に育てられたことを母に伝える。

翌朝、皇帝一行がパレルモへ向かったことを森にいた農民から聞き出したとの報告を近習から受けると、アーサー王の一行はモンレアル城主の案内で6里先にあるパレルモへ向かい、その1里半手前に陣を張る。

翌日アーサーは軍隊を8つの部隊に分け、フロリヤン率いる最初の部隊をパレルモへ先発させ、残りの部隊がそれに続く。これに対し、皇帝軍も

10の部隊で応戦する。フロリヤンがマラゴを落馬させる場面を塔の窓から見ていたフロレット、ティスベ、ブランシャンディヌ（ハンガリー王女）の3人は、フロリヤンをめぐって言い争う。この2度目の戦いでは皇帝軍が数の上で優位だったが、アーサー王軍は見事に応戦し、皇帝軍を城門まで押し返す。フロリヤンは町と城壁を見ようとしてフロレットの姿を見つけ、激しい恋心のために卒倒し、騎士たちによってゴーヴァンの天幕へ運ばれていく。その場面を目撃したフロレットも気を失い、部屋に運ばれる。

戦いの決着がつかず、皇帝が退却を命じ、皇帝軍は町へ戻る。一方でアーサー王の軍も、自陣へ戻って武装を解く。

(12) フロリヤンとフロレットの密会 (v. 4001-4384)

天幕で横になり溜息をつくフロリヤンを見てアーサー王が心配したのに対し、ゴーヴァンは「愛の神」の仕業だと気づく。フロリヤンから皇帝の娘に恋したことを明かされ、ゴーヴァンは助力を約束する。一方、パレルモではフロレットも同じ恋の病に苦しみ、友人のブランシャンディヌにその気持ちを明かす。そこでフロリヤンの消息を知るため、従僕のジョリを敵軍へ送り出す。

ジョリは面会したフロリヤンから、フロレットに抱く愛を明かされ、愛の印として指輪を託される。また、ゴーヴァンからもブランシャンディヌへ指輪を渡すよう頼まれる。パレルモへ戻ったジョリは王女たちに騎士たちの言葉を伝える。フロリヤンが夜間の密会を望んだため、王女たちはジョリを遣わしてフロリヤンに隠し戸の鍵を届けてもらう。

やがて夜になり、フロリヤンとゴーヴァンはパレルモへ向かう。それぞれのカップルは塔の下にある果樹園で密会し、愛を確かめあう。ここで、恋人から遠ざけられている語り手が、2組のカップルを羨ましく思うと明かしている。夜が明けると、騎士たちは天幕へ戻って眠りにつく。

(13) アーサー王と皇帝軍の3度目の戦い (v. 4385-4786)

翌日、アーサー王は有力な諸侯を集め、守りの堅い町の攻撃方法について意見を求める。そしてイヴァンの意見に従い、森へ木を伐り出しに行き、8日間で大型兵器が作られる。フロリヤンとゴーヴァンは毎晩、果樹園で恋人と密会を続けていた。しかしある日の夜、皇帝に仕える邪悪な小人に密会を目撃されてしまう。小人から報告を受けた皇帝は怒り悲しみ、臣下に武装を命じる。その間にフロリヤンとゴーヴァンは、恋人たちを連れて自分たちの天幕へ戻る。

皇帝は娘が隠し戸から逃げ去ったと考え、自分に恥をかかせた娘に失望する。翌日、皇帝は娘を連れ戻すために10の部隊からなる軍を町から出撃させる。この3度目の戦いにおいて、フロリヤンと円卓の騎士たちが活躍したため、皇帝軍は甚大な被害を受け、パレルモへ退却せざるをえなくなる。

(14) フロリヤンとマラゴの決闘裁判 (v. 4787-5811)

戦いが終わり、フロリヤンとゴーヴァンはアーサー王に恋人との結婚の承認を求め、了承される。怒りに燃える皇帝は有力な諸侯を集めて意見を求め、ブランシャンディースの父ジェレミー王の意見に従い、アーサー王に8日間の休戦を求めて牧場での会談を申し入れる。ジェレミー王自身は和平を望み、自分の娘ブランシャンディースも皇帝の娘フロレットも、アーサー王に仕える立派な騎士に嫁ぐべきだと考えていた。

伝令のジェレミー王から休戦と会談を求められたアーサー王は、諸侯に意見を求める。フロリヤンは賛成し、その機会に皇帝フィリメニスの御前でマラゴの裏切りを告発し、マラゴとの一騎打ちを行うつもりだと述べる。フロリヤンの意見に皆が賛同し、翌朝、皇帝とアーサー王の間で会談が行われる。アーサー王は皇帝に対し、マラゴがエリヤデウス王を暗殺して王位を篡奪したため、正義のためにシチリアへきたと述べる。フロリヤ

ンが皆の前でマラゴの裏切りを告発して神明裁判としての決闘を提案すると、承諾したマラゴは最悪の結果を恐れる。

翌日、フロリヤンとマラゴが決闘場へやってくる。激戦の末、マラゴは片耳¹⁷⁾と拳、鼻と唇を切られて敗れ、主君への裏切りを告白する。アーサー王が皇帝に、フロリヤンと皇帝の娘との結婚を提案すると、皇帝は喜んで同意する。また、ハンガリー王は娘ブランシャンディーンをゴーヴァンに嫁がせることにする。マラゴへの処罰については、慣例に通じた12人の王が審議を行い、ロット王の意見が満場一致で認められた。こうしてマラゴは馬に引きずられて八つ裂きにされ、遺体はさらし台に吊るされる。

(15) パレルモでの結婚式と戴冠式 (v. 5812-6443)

翌日、皇帝フィリメニスはパレルモの人々を集めてマラゴの裏切りを告げた後、フロリヤンを新王に迎えるよう提案して賛同を得る。皇帝がこれをアーサー王へ報告し、結婚式と戴冠式の準備が整い、一同はパレルモへ向かう。教会でフロリヤンはフロレットを、ゴーヴァンはブランシャンディーンを妻に迎え、フロリヤンはシチリア王に、ゴーヴァンはハンガリー王になる。その後、城内で豪華な宴が始まる。フロリヤンは母の恩人である忠臣オメールを家令に任命し、皆が喜びに沸く。

宮廷の集いが60日間続いた後、アーサー王と皇帝はそれぞれ帰国の途につく。ロンドンでは、グニエーヴル王妃がアーサー王、ゴーヴァン、ブランシャンディーンを喜んで迎え、宮廷が8日間開かれる。皇帝フィリメニスもコンスタンティノーブルに戻る。

(16) フロリヤンとフロレットの出生 (v. 6444-6877)

フロリヤンとフロレットはシチリアで蜜月を過ごす。2人に子供が生まれ、大司教がフロアールという洗礼名を授ける¹⁸⁾。また、フロリヤンの母は修道院へ入って尼僧となり、その年のうちに亡くなる。

平和のうちに3年が過ぎる。フロリヤン王は狩りを終えて騎士たちと町

を通りかかったとき、扉の前に座る女性の1人が王への不満を漏らすのを耳にする。そこでは、王が妻の言いなりになり、武勇をなおざりにしていると言われていた。そこでフロリヤンは武勇を見せるためにブルターニュへの出立を決意し、フロレットが同行を願い出る。フロリヤンは後事を家令オメールに託し、翌日妻と20人の騎士を伴って出発する。3日目に一行はメッシーナで歓迎され、翌日船に乗り、カラブリアのカトナに着岸する。その後プーリア、テール・ド・ラブールを越え、フロリヤンが治める王国の境までたどり着く。

フロリヤンは同行してきた騎士20人にその場に留まるよう命じ、フロレットと2人きりで出立する。道中、名乗ればすぐに身もとが分かってしまうため、夫に名前を変えるようにフロレットが提案する。フロリヤンは「美貌の野人」と名乗り、妻には「島の陽気姫」と名乗らせることにする。

(17) ドラゴンとの戦い (v. 6878-7014)

2人は森の中を進み、出会った隠者からもてなしを受けた後、翌日にはローマへ向かう。隠者はドラゴンを避けるため回り道を勧めるが、「美貌の野人」は妻とともにローマへ直行する道を進む。そこにいた17フィート以上もあるドラゴンに「美貌の野人」は剣で立ち向かう。しかし反撃にあったため、「島の陽気姫」がドラゴンの脇腹を槍で貫き、息の根を止める。2人は再び馬にまたがり、旅を続ける。

(18) ジュリヤン王との戦い (v. 7015-7347)

森を出た2人は立派な城を見かける。その城の周囲には、千以上の天幕が張られていた。天幕の騎士たちの主君は城内におり、ある騎士の話によると、宿泊を望むのであれば城へ行くしかないが、城に入れば主君と戦わねばならず、勝ち目がないため断念するよう諭される。「美貌の野人」は闘志を掻き立てられ、すぐさま城内にいたジュリヤン王との戦いに挑み、激戦の末に勝利する。

敗れたジュリヤン王の話によると、彼の妻は馬上槍試合で亡くなった前夫の仇討ちを望んでいた。そのため、城へやってくるすべての騎士と対戦し、前夫の命を奪った騎士を倒してほしいと再婚したジュリヤンに命じていた。そんな中、「美貌の野人」に敗戦したのだという。

またジュリヤン王によると、ローマの皇帝が亡くなり、残された20歳の残酷な息子が国中を荒廃させ、貴族たちは国を離れた。その知らせがサラセン人の国に伝わり、スルタンは各地から臣下を呼び集め、その機に乗じてローマを攻囲した。若きローマ皇帝は多くの臣下から見放されていたが、異教徒によるローマの占領を望まぬ諸侯が集結し、ジュリヤン王自身も家臣を引き連れてきていた。ジュリヤンからローマ解放のために助力を求められた「美貌の野人」は、それに同意する。

(19) ローマ解放のための戦い (v. 7348-7732)

ジュリヤン王一行は「美貌の野人」と「島の陽気姫」とともに、2日でローマに到着する。ジュリヤンは伝令をローマ皇帝に送り、「美貌の野人」が考えた敵軍を挟み撃ちする計画を伝える。そして翌日の早朝にその計画は実行に移され、ジュリヤン王と「美貌の野人」がそれぞれの部隊を率いて敵軍に向かう。戦いが始まると、皇帝軍も参戦する。「美貌の野人」はスルタンがローマ皇帝の命を奪おうとしていたところへ駆けつけ、スルタンを一太刀で死に至らしめる。異教徒たちは潰走し、ローマは喜びに包まれる。

ローマ皇帝からすべての戦利品を授けられた「美貌の野人」は、これを全員に分配したばかりか、ローマに属する封土も受け取らなかった。皇帝一行がローマへ戻ったのに対し、ジュリヤン王は臣下に自国への帰還を命じ、自らはアーサー王宮廷へ向かう。同行していた「美貌の野人」と「島の陽気姫」は途中で別の道を進んだが、ジュリヤン王は1人でブルターニュのカマアロットにたどり着き、「美貌の野人」の武勇伝をアーサー王

に語る。

(20) ナビュダンとの戦い (v. 7733-7870)

時は5月だった。「美貌の野人」と「島の陽気姫」は、森での騎行中にしばし草の上で休むことにする。2人が眠りこむと、冒険を求めていたナビュダンという騎士がやってきて、眠る「島の陽気姫」を見て恋に落ちる。ナビュダンに連れ去られそうになった「島の陽気姫」が大声をあげたため、目を覚ました「美貌の野人」は一騎討ちでナビュダンを破り、アーサー王のもとへ送り届ける。

ブルターニュへ向かった「美貌の野人」はその後もアーサー王のもとへ、戦いで打ち負かした20人の騎士を送る。アーサー王は、送り主がフロリヤンなのではないかと考えていた。

(21) アーサー王宮廷への到着とコンスタンティノーブルでの戴冠式
(v. 7871-8176)

復活祭を迎え、アーサー王はロンドンで宮廷を開く。大ミサが終わり、皆が大広間に集まっていたところへ「美貌の野人」と「島の陽気姫」が到着し、アーサー王一行との再会を喜ぶ。

一同が大広間へ戻って食事を済ませた後、フロリヤンが海に面した回廊へ気晴らしに向かうと、船が着岸する。到着したのはギリシアからきた400人を下らぬ騎士で、皇帝フィリメニスの死を伝え、フロリヤンに皇位の継承を求める。承諾したフロリヤンは15日後に、フロレットと伝令騎士たちとともに出発する。それから15日間の旅を経てコンスタンティノーブルに到着したフロリヤンとフロレットは、聖女ソフィー教会で戴冠式を挙げる。

フロリヤンは皇帝として立派に帝国を治める。戴冠式から3年後、フロリヤンはフロレットと400人の騎士を連れ、シチリアに行く決意を固める。パレルモに到着したフロリヤンとフロレットは、シチリアを任せていた家

令オメールと、6歳になった息子フロアールと再会する。

(22) モンジベルでのフロリヤンとフロレット (v. 8177-8277)

フロリヤンは2つの冬と1つの夏をパレルモで過ごす。ある日の朝、フロリヤンは20人の騎士とともに森へ狩りに出かけ、大きなまばゆい雄鹿を見つける。その追跡中にフロリヤンは騎士たちとはぐれ、山の頂上で雄鹿が城の中へ入っていく。城内に入ってさらに追跡を続けると、そこには育ての母モルガースがいた。雄鹿を送り出したのはモルガースで、人間界でまもなく死ぬ定めフロリヤンを呼び寄せるためだった。そこは死とは無縁の魔法の城であり、やがてモルガースの兄弟アーサーが致命傷を負って連れてこられるのだという。フロレットのことを想ってフロリヤンが涙すると、モルガースはフロレットを迎えに3人の妖精を遣わす。フロレットはすぐにモンジベルへ連れてこられ、以後2人の噂を聞いた者はいないという。

(23) 結語 (v. 8278)

語り手はここで物語を終える。

3. 先行作品群との接点——「アーサー王物語」のケース

成立年代が1268年以降と推測される『フロリヤン』には、12世紀後半以降に中世フランス語の韻文や散文で書き継がれてきた「アーサー王物語」だけでなく、「武勲詩」「古代物語」「冒険物語」などの影響も色濃く残されている。ここでは、「アーサー王物語」の『ランスロ本伝』およびクレティアン・ド・トロワの物語群との比較から、『フロリヤン』の作者が先行作品群の要素を作中で巧みに利用しているケースについて検討する¹⁹⁾。

1) 『ランスロ本伝』との接点

誕生後まもなく妖精モルガースによって誘拐されるフロリヤンが、モン

ジベルで立派に成長するという筋書きにまず注目しよう。これは「聖杯物語群」の中でも最も早く成立した『ランスロ本伝』（1215～1225年頃）に出てくる場面を踏まえたものである。そこでは、錯覚により湖中に位置するように見える森の中の国で、「湖の貴婦人」が誘拐した幼子ランスロを立派に育てている。また、『フロリヤン』の作者が『ランスロ本伝』の筋書きを知っていたことの傍証として、『フロリヤン』でのアーサー王軍と皇帝軍との3度目の戦いに出てくるガルウー（Galehou）の名を挙げることができる（v. 4771）。アーサー王軍に属するこの騎士は、『ランスロ本伝』に登場する「遠島国」の領主ガルオー（Galehaut）に相当する。ガルオーはアーサー王国へ侵攻するものの、ランスロへの深い愛情ゆえにアーサー王へ臣従を誓った騎士である。

『ランスロ本伝』の冒頭²⁰⁾で、テール・デゼルトのクロードス王はランスロの父にあたるベノイックのバン王に攻撃を仕掛け、バン王にはトレープの町だけが残される。そこでバン王はアーサー王へ援軍を要請するため出立し、家令をクロードス王のもとへ送って40日以内にアーサー王からの援軍がなければトレープの城を明け渡す用意があることを伝えさせる。家令はバン王の出立を誰にも明かさぬよう言われていたにもかかわらずクロードス王に知らせてしまい、そのためクロードス軍がただちにトレープの城へ攻め入る。城を離れていたバン王は城が焼け落ちるのを目撃して息絶える。その後、王妃エレヌスが夫のもとへ向かっている間に、馬の下に置かれていた幼子ランスロは「湖の貴婦人」に誘拐される。

『ランスロ本伝』に見られるバン王の家令の裏切りは『フロリヤン』のエリヤデウス王の家令マラゴによる裏切りとなり、『ランスロ本伝』で幼子ランスロを誘拐する「湖の貴婦人」（ヴィヴィアース、ニニアースなどの名で呼ばれる）の役割は『フロリヤン』のモルガーヌに受け継がれている。モルガーヌは仲間の2人の妖精とともに舟でやってきてフロリヤンを連れ

去るが、「湖の貴婦人」もその異名の通り住まいが深い森の中で湖が最も深く見える位置にあることから、両者に水域とのつながりが顕著である点も注目に値する。

育ての親である2人の妖精が、主人公の騎士叙任に関与する点も似通っている。ランスロのケースでは、彼が18歳になりアーサー王宮廷での騎士叙任を望むと、「湖の貴婦人」が彼に騎士道の意味を教え諭し、武具・甲冑や馬など騎士叙任に必要なものを一式揃え、アーサー王にランスロの騎士叙任を直接求めている。これに対してモルガースは、フロリヤンが15歳になると王と王妃の子であることを彼に教え、自ら彼の騎士叙任を行っている。ここまでは2人の妖精の働きは似通っている。しかしランスロがアーサー王宮廷に迎えられて以降に最初の武勲を果たす²¹⁾のに対し、フロリヤンはモルガースから魔法の舟を授けられて複数の冒険をあらかじめ経験し、彼自身の到着前からその名声がアーサー王宮廷に届くよう取り計らわれている。

主人公の実の母親については、『ランスロ本伝』と『フロリヤン』で役割が著しく変わっている点にも注意しよう。『ランスロ本伝』では、息子がさらわれたことを知ったエレヌ王妃は悲しみに暮れ、その場を通りかかった尼僧院長に事の次第を語り、すぐさま尼僧にしてもらう。そしてバイン王の亡骸の埋葬後、エレヌ王妃が住む「王立修道院」には多くの尼僧が集まるようになったという。これに対して『フロリヤン』では、シチリア王妃だった主人公の母がまさしく筋書きの要の位置にある。シチリア王位を篡奪した元家令のマラゴが王妃の逃れたモンレアルの町を15年にわたって攻囲したため、マラゴに加勢するギリシア皇帝の軍と母を解放しようとするフロリヤンに加勢するアーサー王軍との壮絶な戦いが繰り上げられるためである。

2) 『エレックとエニッド』との接点

『フロリヤン』の作者がクレティアン・ド・トロワの作品群を熟知していたことは、双方を比較すれば明らかである。まずはクレティアンの現存第1作『エレックとエニッド』（以下『エレック』と略記、1170年頃）に見つかるエピソードを、『フロレット』の作者が独自に改変している例を検討してみよう。

<1> 雄鹿狩り

『エレック』はアーサー王が復活祭の日カラディガンで開く宮廷から始まり、王が古くからの慣例に従って「白い雄鹿狩り」の開催を宣言している。このイベントでは、「白い雄鹿」を仕留めた騎士に宮廷で最も美しい乙女への接吻が許された。この狩猟の見物に出かけた王妃グニエーヴルに1人の侍女と「円卓の騎士」の1人エレックが同伴する。ところが道の途上で騎士イデールの小人から侮辱を受けたエレックは、イデールの後を追跡するうちにある城市に至り、「ハイタカをめぐる戦い」で騎士イデールに勝利して報復する。この戦いに参加するには恋人が必要だったため、エレックは宿を提供してくれた貧しい陪臣から娘エニッドを妻としてもらい受け、戦いに臨んでいた。エレックがエニッドを連れてアーサー王宮廷に戻ると、「白い雄鹿」を仕留めたアーサー王が、宮廷で最も美しい乙女と認められたエニッドに接吻する。ここまでの序章を、クレティアン・ド・トロワは物語の「最初の行」(*li premiers vers*, v. 1808)と呼んでいる。

このように『エレック』の序章を飾る「白い雄鹿狩り」のエピソードを、『フロリヤン』の作者は独自に改変している。まずは王が狩りを提案した理由であるが、『エレック』ではアーサー王が先王以来途絶えていた「慣例」を復活させるために狩猟を提案したのに対し、『フロリヤン』のエリヤデウス王は気晴らしと楽しみのため (*Pour nos deduire et soulacier*, v. 216) 諸侯に雄鹿狩りを提案している。次に狩りのエピソードの眼目であるが、

『エレック』ではこの過程で主人公の最初の武勲と結婚が描かれるのに対し、『フロリヤン』では家令マラゴが王妃への道ならぬ恋を実現するために、エリヤデウス王を暗殺する場面となっている。

< 2 > 武勇をなおざりにする騎士

『エレック』では序章（「最初の行」）の後、エレックが結婚生活に惑溺して騎士としての本分を忘れてしまう。ある朝、エレックが眠りこんでいると思ったエニッドは嘆きの言葉を口にし、これをきっかけにエレックは妻の自分への愛情に疑問を抱く。そこでエレックは妻を冒険に同伴させることで試練にかける。夫の前を騎行するエニッドは夫に話しかけることが許されていなかったが、危険が襲うたびに夫に知らせてしまう。こうして冒険の旅の過程で、エレックの武勇のみならず夫婦愛が再確認される²²⁾。

主人公が妻を過度に愛するあまり武勇をなおざりにするという筋書きを、『フロリヤン』の作者は巧みに再利用している。フロリヤンがパレルモでシチリア王となってフロレットを妻に迎えるのは、物語の4分の3が過ぎたあたりのことである。その後2人は子宝に恵まれ、3年にわたって平和な時を過ごす（ここまでは、『エレック』の序章に対応していると考えられる）。その後、フロリヤンは狩猟からの帰り道にパレルモの大通りで、王妃の言いなりになって武勇をなおざりにしているという自分への非難を耳にし、冒険の旅を決意する。エレックから同行を命じられたエニッドとは異なり、王妃フロレットは自ら夫に同行を願い出る。またエレックとエニッドが悲壮感の漂う旅の過程で夫婦愛を再確認するのとは違って、フロリヤンとフロレットは旅の最初から信頼関係が強く、「たがいに大いなる喜びを表して」（*L'un a l'autre grant joie fait*, v. 6820）騎行を続け、ともに冒険を切り抜けていく。

< 3 > 愛する女性から課された試練

『エレック』の一連の冒険を締めくくるのは、エヴラン王の居城ブラン

ディガンを舞台とする「宮廷の喜び」(‘Joie de la Cort’, v. 6119) の冒険である。城内には空気の壁に囲まれた庭園があり、周りには兜をつけたままの騎士たちの生首が掛けられ、最後の1本には角笛が掛けられていた。エレックは、庭園の番人マボナグランを一騎討ちの末に破り、角笛を吹いて魔法を解除する。庭園は、エニッドの従姉妹にあたる女性が恋人のマボナグランを常に傍らに置いておくために考案された場所だった²³⁾。

このように、勇猛な騎士が主人公に敗北を喫するまで意中の女性から課された試練に挑み続けるというエピソードは、『フロリヤン』の物語の前半と後半の、異なる2つのエピソードの中で、形を変えて展開されている。

1つ目は、モルガースから授けられた魔法の舟で出立したフロリヤンが経験した4つ目の冒険、つまり「編んだ髪を集める騎士」との一騎討ちである (vv. 1743-2017)。この騎士は意中の貴婦人から、天幕を作れるほど多くの女性の編んだ髪を集めるよう求められ、フロリヤンに敗れるまで300人以上の騎士を倒し、同行していた女性の編んだ髪を集めていた。

2つ目は、武勇をなおざりにしていると非難されてフロレットとともに冒険の旅に出たフロリヤンの2つ目の冒険、つまりジュリヤン王との一騎討ちである (vv. 7015-7347)。ジュリヤン王の妻は前夫を馬上槍試合で亡くしており、その仇討ちを願っていた。そのため再婚相手のジュリヤンに城へやってくる騎士との対戦を命じ、そうすれば前夫の命を奪った騎士と遭遇できるはずだと考えていた。

< 4 > 寓意的図柄

『エレック』の大団円は、クリスマスにナントで開催されるエレックの戴冠式である。そこでのエレックの衣裳は4人の妖精が作ったものであり、「幾何」、「算術」、「音楽」、「天文学」の図柄が刺繍されていた。こうした「4科」の寓意的図柄に対応するのが、『フロリヤン』ではモルガースが主人公に授けた「魔法の舟」の内部を飾る4つの壁掛けである。壁掛

けの1つ目には天空（星や惑星など）、2つ目にはアダムとイヴ、アベルとカインの物語、3つ目にはトロイ戦争とその後の物語、4つ目には「愛の神」とその信奉者たち（トリスタンと金髪のイブーを含む）が描かれていた。つまり「魔法の舟」の内部を飾る壁掛けに、裏切り、戦争、恋愛といった『フロリヤン』に出てくる主要なテーマが凝縮されているのである。

モルガーヌはこの「魔法の舟」を15歳になったフロリヤンに授けるが、彼が7歳から8年間にわたって学ぶ教育科目のうち、「自由7科」(‘VII. ars’, v. 755) が最初にあげられているのも偶然ではないだろう。なぜなら「自由7科」は、「文法」「修辞学」「弁証法」の「3学（トリウィウム）」と、まさしくエレックの衣裳に描かれていた「4科（クワドリウィウム）」からなっているからである。また、「魔法の舟」の壁掛けの1つに描かれた天空は、エレックの衣裳に描かれた「天文学」を連想させる。

クレティアンはエレックの衣裳に施された寓意的図柄を描くにあたり、その保証人としてマクロピウスの名をあげている²⁴⁾。これに対し、『フロリヤン』の作者は「魔法の舟」の内部を飾る壁掛けの図柄を描くのに、クレティアン・ド・トロワの名をあげてはいない。しかし『フロリヤン』の読者＝聴衆は、「魔法の舟」の壁掛けの描写から、エレックの衣裳の図柄をすぐに連想したに違いない。

3) 『クリジェス』との接点

主人公フロリヤンがシチリア王子であり、コンスタンティノーブル皇帝の娘と結婚するという『フロリヤン』の筋書きと舞台は、クレティアン・ド・トロワの現存第2作『クリジェス』（1176年頃）を主な着想源にしていると推測される。『クリジェス』の構成は、主人公の話にその両親の話を先行させるという2世代並置となっており、物語前半ではコンスタンティノーブル皇帝アレクサンドルとソルダモールとの牧歌的な恋愛が語られて

いる²⁵⁾。クリジェスはこの夫婦の一粒種であり、物語後半ではアレクサンドルの死後に王位についた弟アリス、その妻フェニス、クリジェスの三角関係が語られている。フェニスは魔法の秘薬を口にして死者を演じ、クリジェスとともに逃亡生活を送る。最後には事の真相を知ったアリスが憤死し、クリジェスとフェニスはコンスタンティノーブルへ帰還して戴冠式を挙行する。

< 1 > 戦闘と恋愛

『クリジェス』を特徴づけている要素は、「武勲詩」を思わせる戦闘の場面と、主人公たちが恋愛感情を吐露する独白（モノローグ）の多用である。物語前半でブルターニュへ渡ったアレクサンドルはアーサー王に裏切りを働いたアングレス伯の軍を完膚なきまでに打ちのめすが、ソルダモールに恋した際には長い独白で愛の苦悶を語っており、華々しい武勇とのコントラストが際立っている。ソルダモールもまた、2つの長い独白の中で、今まで恋をみくびってきた自分が初めて味わう感情を前にして狼狽する。クリジェスとフェニスの恋愛を語る物語後半でも、戦闘と恋愛の状況が対比的に描かれている。

『フロリヤン』では、シチリア王妃（主人公フロリヤンの母）の解放を目論むアーサー王の軍とコンスタンティノーブル皇帝フィリメニスの軍との激戦、さらにはその過程で偶然出会うフロリヤンと皇帝の娘フロレットがそれぞれ恋愛感情を独白で吐露する場面が、『クリジェス』と重なっている。『クリジェス』では、物語前半でアレクサンドルがゴーヴァンの妹ソルダモールを妻に迎えている。しかし『フロリヤン』では、フロリヤンとフロレットの結婚とともにフロリヤンの戦友ゴーヴァンがハンガリー王女ブランシャンディースを妻に迎え、2つの結婚が同時に行われているところが新機軸である。ゴーヴァンの正式な結婚を描く場面は、中世フランス文学では『フロリヤン』が初出ではないだろうか²⁶⁾。

＜2＞ 主人公の戴冠

クレティアンの『クリジェス』の「序」には、ギリシアでの学問と騎士道の名声がローマに渡り、次いでフランスに移るという有名な「移転」のトポスが見つかるが、ここに3つの国が現れるのは偶然ではない。クリジェスは、父アレクサンドルを介してギリシア文明を受け継ぎ、ブルターニュ生まれの母ソルダモールを介してフランスの遺産を、さらにドイツ皇帝の娘であるフェニスとの結婚によりローマの遺産を継承する。そのため、大団円でのクリジェスの戴冠は、この3つの国の理想的な融合だと考えられる。

これに対して『フロリヤン』では、結末に向かうにつれて主人公は亡き父からシチリアを受け継ぐだけでなく (v. 6441sq), 妻の父の死後にはギリシアも手中に収めている (v. 8012sq)。またアーサー王国も重要な役割を果たしているため、『フロリヤン』は結果的に、ブルターニュ (大ブリテンと小ブリテン)、シチリア、ギリシアという3つの領域の政治的な融合の物語になっている²⁷⁾。ギリシア皇帝となるフロリヤンの姿は、父ラック王の死後にナントで戴冠式に臨んだエレックの姿を思い起こさせるが、地政学的背景を考慮すればそれ以上に、アリス王の死後コンスタンティノーブルへ帰還して戴冠するクリジェスの姿を念頭に置いたものだと言えるだろう。

4) 『イヴァン』との接点

クレティアン・ド・トロワが1177年から1181年頃に『ランスロまたは荷車の騎士』(以下『ランスロ』と略記)と並行して執筆したのが『イヴァンまたはライオンを連れた騎士』(以下『イヴァン』と略記)である。先述した通り、『フロリヤン』の作者は、主人公の誕生・誘拐と幼少年期について『ランスロ本伝』を着想源にしたと考えられ、クレティアンの『ランスロ』からの借用は少ないと推測される。ここでは、『フロリヤン』の着想

源と考えられる、『イヴァン』のエピソード群について検討する。

<1> 夫の殺害者との結婚

『イヴァン』の冒頭で、従兄弟カログルナンの失敗談を聞いたイヴァンは「バランTONの泉」へ行き、泉の番人「赤毛のエスクラドス」との一騎討ちを制する。イヴァンは罨にはまって城内の部屋に閉じこめられるが、そこへ泉の奥方に仕える侍女リュネットが助けにくる。その後、エスクラドスの葬送が行われ、悲嘆に暮れる奥方ローディーヌの姿を小窓から認めたイヴァンはたちまち恋に落ちる²⁸⁾。リュネットはイヴァンの恋心を見抜くと奥方ローディーヌのもとへ戻り、嘆くのをやめて泉を守るために別の夫を迎えるよう提案する。夫を破った騎士が夫よりも武勇に優れているというリュネットの論法に負け、ローディーヌはイヴァンとの再婚に同意する。

イヴァンの結婚に至るまでのこうした筋書きは、『フロリヤン』の冒頭と重なっている。エリヤデウス王を暗殺した家令マラゴが、シチリアの諸侯の同意を得た上で国を守るという大義を振りかざすことで、寡婦となった王妃に再婚を提案しているからである。しかしながらマラゴは、エリヤデウス王の存命中に王妃へ愛の告白をして断られ、王妃を手に入れるために王を殺害したばかりか、王の葬儀では極度の悲しみを演じている。主君を失った国を守るという大義名分が、2作品ではまったく異なる形で用いられていると言えるだろう。

<2> 巨人との戦い

『イヴァン』後半では、蛇の攻撃から救出したライオンを戦友に持つことで「ライオンを連れた騎士」と呼ばれるようになったイヴァンが、弱者を守り悪に立ち向かう騎士へと成長する。その武勇伝の1つが巨人「山のアルパン」²⁹⁾との戦いである。この巨人は、ある城主から6人の息子を奪って2人を殺害し、次に城主の娘を奪い取ろうとしていた。苦境を城主から聞いたイヴァンは、ライオンに助けられて巨人退治に成功する。巨人

に苦しめられていたのは、ゴーヴァンの甥たちと姪であった。

このエピソードを彷彿とさせるのが、『フロリヤン』前半の魔法の舟で出立したフロリヤンが3度目に経験する冒険、つまり2人の巨人との戦いである。この巨人たちはある公爵を殺害し、その3人の娘を島の荒廃した城に幽閉していた。

< 3 > 「乙女たちの島」

「山のアルパン」は単独の巨人だが、『イヴァン』には「悪魔の2人息子」³⁰⁾と呼ばれる2人の巨人が登場するエピソードもある。それは『イヴァン』の結末近くに位置する「最悪の冒険の城」エピソードである。この城では300人ほどの乙女が機織り女工として過酷な労働を強いられていたが、そのうちの1人の説明によると、昔「乙女たちの島」('L'Isle as Puceles', v. 5259)の王が宮廷や国々を旅していたとき、「悪魔の2人息子」が住む城にやってきて戦うことになったという。王はまだ18歳で、この試練に耐えられぬと分かった、毎年自分の国から30人の乙女を貢物として差し出す条件で命を助けられたのだった。イヴァンはここでもライオンに助けられ、苦戦の末に2人の巨人を倒して囚われていた乙女たちを解放し、城主の娘との結婚を断って次の冒険へ向かう。

このエピソードと重なりあうのは、フロリヤンが「2人の巨人との戦い」の直前に経験した、「美しい乙女たちの島」での冒険 (v. 1256-1630) である。この冒険では、「ベリカン」³¹⁾と呼ばれる混成獣が毎日「美しい乙女たちの島」から娘1人を生贄として求め、貪り食っていた。フロリヤンはこの獣を倒した後、島の女王アルマンディーヌからの求婚を断り、旅を続ける。ここでは何よりも「乙女たちの島」という呼称が、『イヴァン』と『フロリヤン』の当該エピソードの密接な関連を示唆している。

5) 『ペルスヴァル』との接点

キース・バズビーや『フロリヤン』のシャンプイオン版の校訂者たちが指摘しているように³²⁾、『フロリヤン』の作者はクレティアン・ド・トロワの遺作『ペルスヴァルまたはグラアルの物語』（以下『ペルスヴァル』と略記、1181～1190年頃）から、数行にまたがる詩行の借用を何度も行っている。以下では『ペルスヴァル』の中の『フロリヤン』の着想源になったと思われるエピソード群を検討する。

< 1 > 兵糧攻めと商船の到着

『ペルスヴァル』の前半は、「荒れ森」で騎士道とは無縁の生活を送ってきた少年ペルスヴァルが、数人の騎士に出会ったのを機にアーサー王宮廷へ赴いて騎士になる決意をする場面から始まる。母の館から出立したペルスヴァルは、ゴルヌマンのもとで騎士道を学んだ後、群島王クラマドゥーによる攻囲に苦しんでいたブランシュフルールの居城ボールパールにたどり着く。ペルスヴァルはクラマドゥーの家令アンガングロンを倒してアーサー王宮廷へ捕虜として送り出すが、クラマドゥーはなおも攻囲を続け、兵糧攻めによるボールパールの陥落を目論んでいた。ちょうどその折、1艘の商船が激しい風に吹き寄せられてボールパールの港にたどり着き、多くの食糧をブランシュフルールが買い取る。こうしてボールパールでは食糧難の心配がなくなり、ペルスヴァルは一騎討ちで破ったクラマドゥーを捕虜としてアーサー王のもとへ送る。

『フロリヤン』の作者はまさしく『ペルスヴァル』のこの場面を着想源として、シチリア王妃（主人公の母）が王位篡奪者マラゴから15年（‘XV. anz’, v. 2746）にわたる攻囲を受けた場面を描いたと思われる。筋書きの上で『フロリヤン』の作者が行った改変は、兵糧攻めにあう城市に商人の舟が到着する場面である。『ペルスヴァル』のボールパールへの商船の到着は、飢餓に苦しむ城内の人々にとっての僥倖であった。これに対して『フ

ロリヤン』では、着岸した商人たちは籠城中のシチリア王妃ではなく攻囲中のマラゴへ挨拶に向かい、アーサー王がマラゴをシチリアから追い出すために軍団を用意しているという知らせをもたらしている。これを契機にマラゴがコンスタンティノーブル皇帝に援軍を求め、物語は本格的に動き出すことになる。

< 2 > 食を断つアーサー王

『ペルスヴァル』の先述したブランシュフルール救出のエピソードの最後で、ペルスヴァルとの一騎討ちに敗れた群島王クラマドゥーは、ウェールズのディスナダロン（‘Disnadaron an Gales’, v. 2755）で開かれていたアーサー王の宮廷に向かっていた。その日は聖霊降臨祭（‘Pantecoste’, v. 2787）で、ミサが終わり、宮廷の人々は食卓についていた。そこで食事開始の提案を家令クウから受けたアーサー王は、こう述べている。

-Kex, dist li rois, leissiez m’an pes,
Que ja par les ilaz de ma teste
Ne mangerai a si grant feste
Que je cort anforciee tiegne,
Tant qu’a ma cort novele viegne. » (v. 2824-2828)

「クウよ」と王は言った。「放っておいてくれ。私の顔にある両目にかけて、私が大諸侯会議を開いているとても大切な祝日に、私の宮廷へ何か知らせがこない限り、私は食事をしないからだ」。

そこへクラマドゥーが到着し、ペルスヴァルからの伝言をアーサー王にもたす。このようにアーサー王が冒険を待ちながら食を断つという「慣例」は、以後の「アーサー王物語」に特有のモチーフの1つとなっている³³⁾。『フロリヤン』の作者もこのモチーフを、「美しい乙女たちの島」エ

ピソードの最後で利用している。

先述した通り、フロリヤンがこの島で「ペリカン」という混成獣を退治した後、島の女王アルマンディーヌが20人の乙女を連れてカラディガンのアーサー王宮廷へ向かうが、その日は聖霊降臨祭（‘Penthecouste’, v. 1537）だった。ここでも家令クウから食事の開始を促されたアーサー王は、次のように述べている。

-Keus, fet li rois, laissez m'en pes

Que ja, par Dieu, n'i mangerai

Devant que noveles orrai

Ou de noviele ou d'aventure

Quex qu'ele soit, ou bone ou dure ! » (vv. 1546-1550)

「クウよ」と王は言った。「放っておいてくれ。神の名にかけて、知らせや冒険を、それが良きものであれ辛いものであれ耳にしないうちには、私は食事をしないからだ」。

そこへアルマンディーヌ女王一行が到着し、フロリヤンの武勇譚を伝え聞いたアーサー王はゴーヴァンの提案を受け、馬上槍試合を開催してフロリヤンを呼び寄せることにする。『ペルスヴァル』でも食を断っていたアーサーは、クラマドゥーからペルスヴァルの武勇伝を聞き、その後「雪の上の血の滴」エピソードでペルスヴァルとの再会を果たしている。

< 3 > 主人公が果たすべき任務

『ペルスヴァル』前半の、主人公が一連の冒険を経てアーサー王一行と再会し、カルリヨンの宮廷で祝宴が催される場面は、物語の転換点にあっている。なぜなら祝宴の3日目に宮廷へやってきた「醜い乙女」が、漁夫王の館でのペルスヴァルの振舞いを語り、その直後にペルスヴァルは

出立するからである。「醜い乙女」の話では、目撃した「血の滴る槍」と「グラアル」についてペルスヴァルが質問していれば、漁夫王の怪我が回復して王国に繁栄が戻るようになっていたという。「醜い乙女」が宮廷に集う騎士たちに「誇り高き城」の冒険とモンテスクレールの乙女の救助という2つの冒険を示唆してその場を後にすると、多くの騎士がいずれかの冒険に身を投じる誓いを立てる。しかしペルスヴァルだけは、「血の滴る槍」と「グラアル」の謎の解明に向けて出立する決意を固める。

このように若き主人公がアーサー王宮廷で果たすべき重要な任務を知る場面に相当するのが、『フロリヤン』では主人公が魔法の舟による一連の冒険の果てに馬上槍試合に参戦し、そこでアーサー王と初めて対面するエピソードである。王宮で祝宴が開催されると、そこへモルガースの使者が舟で到着し、モルガースの手紙をフロリヤンに手渡す。その手紙にはフロリヤンの出自が記され、暗殺された父の仇討ちと、マラゴによって攻囲されている母の救出を求めている。この場面では、育ての母モルガースの手紙がアーサー王宮廷に届けられ、それを主人公自身が皆の前で読み上げることで、己の果たすべき任務を悟るという筋書きになっている。

4. おわりに

本稿では、『フロリヤン』の作者が多くの先行作品から行っている筋書き・テーマ・モチーフの借用のうち、検討対象を「アーサー王物語」、なかでもクレティアン・ド・トロワの作品群と『ランスロ本伝』に絞る、その独自の改変について検討した。『フロリヤン』の2つ目の校訂本を1947年に刊行したウィリアムズが指摘したように、「この作品は著者が他の典拠から行った借用を貼りつけたスクラップブックなのではなく、むしろ作品を読んだり聞いたりして吸収した人が見せた文学的な努力なのである」³⁴⁾。

クレティアンの作品群と比較した場合、特に際立ってくる『フロリヤン』の獨創性は、フロリヤンがシチリアとギリシアの支配者としての地位を確立した後、モルガースが彼をモンジベルという名の異界へ呼び寄せ、永遠の生を与えるという大団円に認められる³⁵⁾。ここでも物語の構造を支えているのは、クレティアンの現存第1作『エレック』である。先述した通り、『エレック』では「白い雄鹿狩り」エピソードから物語の序章（「最初の行」）が始まり、妻を溺愛するあまり懦弱者に成り下がったエレックが妻とともに行う冒険旅行が物語の第2幕となっている。

この筋書きをなぞるように『フロリヤン』は「雄鹿狩り」から始まり、主人公たちの結婚までに4分の3にあたる詩行を費やした後、夫婦の冒険旅行を経て戴冠式に至る。ここで完結するのが物語の常道であるが、『フロリヤン』の作者は物語冒頭に続いて新たに「雄鹿狩り」を用意し、フロリヤンを育ての母モルガースの待つ異界へと誘う。しかもフロリヤンには、王＝皇帝として現世に戻る可能性がまったく残されていないのである。

謝 辞

本研究はJSPS 科研費 JP20K00481の助成を受けたものである。ここに特記し感謝の意を表したい。

注

- 1) フィリップ・ヴァルテール（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）『アーサー王神話大事典』原書房、2018年、5頁。
- 2) 本稿でのクレティアン・ド・トロワの物語群からの引用には、ガリマール出版のプレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』（D. Poirion, (dir.), *Chrétien de Troyes, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1994）を用いる。
- 3) G. Paris, « Romans en vers du cycle de la Table ronde », *Histoire littéraire de la France*, t. 30, 1888, p. 1-270 (ici, p. 14).

- 4) 拙稿「《伝記物語》の変容—ギヨーム・ル・クレール作『フェルギュス』をめぐって」, 中央大学『仏語仏文学研究』第39号, 2007年, 25-67頁。
- 5) 拙稿「《伝記物語》の変容(その2)—『グリグロワ』をめぐって」, 中央大学『人文研紀要』第59号, 2007年, 47-80頁。
- 6) 拙稿「『名無しの美丈夫』におけるゴーヴァン」, 中央大学『仏語仏文学研究』第38号, 2006年, 77-91頁。
- 7) 拙稿「《アーサー王物語》とクマの神話・伝承」, 『中央大学経済学部創立100周年記念論文集』, 2005年, 531-549頁(『イデール』については533頁および538-539頁)。
- 8) 拙稿「クレチアン・ド・トロワ以降の古仏語韻文作品におけるゴーヴァン像」, 篠田知和基編『神話・象徴・文学 III』楽浪書院, 2003年, 481-518頁(『メロージス・ド・ボールレゲ』については498-503頁)。
- 9) 拙稿「3本目の剣を祖国に残すメリヤドゥック—13世紀古フランス語韻文物語『双剣の騎士』を読む」, 『続 英雄詩とは何か』中央大学出版部, 2017年, 197-232頁。
- 10) 拙稿「《伝記物語》の変容(その3)—ロベール・ド・ブロワ作『ボードゥー』をめぐって」, 中央大学『仏語仏文学研究』第51号, 2019年, 1-32頁。
- 11) 本稿で用いる『フロリヤン』の底本は, アニー・コンプとリシャール・トラクスラーによる校訂本(以下ではシャンピオン版と略記)である(*Floriant et Florete*, édition bilingue établie, traduite, présentée et annotée par A. Combes et R. Trachsler, Paris, Honoré Champion, 2003)。なお『フロリヤン』の校訂本はこれまで3度刊行されており, 最初の校訂本はフランシスク・ミシェルが1873年に, 2つ目の校訂本はハリー・F・ウィリアムズが1947年にミシガン大学出版局から刊行している(*Floriant et Florete*, éd. par H. F. Williams, Ann Arbor, University of Michigan Press, 1947, 以下ではウィリアムズ版と略記)。
- 12) 拙稿「『フロリヤンとフロレット』における妖精モルガーン」, 中央大学『仏語仏文学研究』第53号, 2021年, 33-64頁。
- 13) K. Busby, “The Intertextual Coordinates of *Floriant et Florete*”, *French Forum*, Vol. 20, No. 3, 1995, pp. 261-277.
- 14) フランシスク・ミシェルによる最初の校訂本は第8270行で終わっており, 最後の部分が欠けているが, それはこの部分を伝える紙が皮表紙の内側に隠されていたためである。写本がニューヨーク公立図書館に寄贈され, 修復が行われたときに「結語」を含む作品の最後の部分が発見され, 『フロリ

ヤン』が未完作品ではないことが証明された。

- 15) フロリヤンが「舟を率いる騎士」(Chevalier qui la nef maine) という異名を名乗る件は、「伝記物語」の系譜に属する「双剣の騎士」(1235年頃)で自分の名を知らなかった主人公メリヤドゥックがクウに「双剣の騎士」と呼ばれ、自らもそう名乗ることにする件を想起させる。いずれのケースでも異名は、主人公が予備試練の最中にあることを表している。
- 16) 「サルデュイナ」(sarduinas) はその名の通り、おそらくコルシカ島の南に位置するサルデーニャ島に棲息すると考えられた怪物である。
- 17) 片耳の切断は、中世期に泥棒に対して実際に行われた罰の1つである。
- 18) フロアール (Froart) という洗礼名を授けるにあたり大司教は、「彼が長生きして武具を操れば、彼によって多くの盾が壊される (frouez) でしょう」(v. 6511-6512) と述べているため、フロアールの名が「壊す」を指す動詞「フルエ」(frouer) をもとにしていることが分かる。
- 19) ここでの分析には主として、ウィリアムズ版 pp. 26-40 と、シャンピヨン版 p. XXXII-LXIV を参照した。
- 20) 拙稿「新旧の主君へ尽くすべき忠節—『ランスロ本伝』の描く騎士フアリアン像」, 『英雄詩とは何か』中央大学出版部, 2011年, 209-236頁。
- 21) 拙稿「『ランスロ本伝』の「苦しみの砦」エピソードをめぐる考察」, 中央大学『仏語仏文学研究』第45号, 2013年, 1-33頁。
- 22) 神沢栄三「『couple courtois et royal』の探索—*Erec et Enide* の世界」, 『名古屋大学文学部研究論集』第70号, 1977年, 153-176頁。
- 23) 拙稿「〈アーサー王物語〉における〈異界〉—不思議な庭園とケルトの記憶」, 細田あや子・渡辺和子編『異界の交錯（上巻）』リトン, 2006年, 127-148頁。
- 24) Ph. Walter, « Chrétien de Troyes et Macrobe (*Erec et Enide*, v. 6730 et 6733) », *Transports. Mélanges offerts à Joël Thomas*, Textes réunis par M. Courrént, G. Jay-Robert et T. Eloi, Presses Universitaires de Perpignan, 2012, p. 325-337.
- 25) 拙著『クレチアン・ド・トロワ研究序説—修辞学的研究から神話学的研究へ』（中央大学出版部, 2002年）第Ⅱ部・第2章「『クリジェス』に見る「構造のイロニー」—2世代並置による2部構成の戦略」を参照。
- 26) シャンピヨン版 p. LIV を参照。
- 27) K. Busby, art. cit., p. 273.
- 28) 中世の「アーサー王物語」における葬送については, K. Watanabe, « Les rites funéraires dans les romans arthuriens en vers des XII^e et XIII^e siècles »,

- dans : A. Caiozzo (dir.), *Mythes, rites et émotions. Les Funérailles le long de la Route de la soie*, Paris, Honoré Champion, 2016, p. 51-71を参照。
- 29) 「山のアルパン」については, C. Lecouteux, « Harpin de la Montagne (*Yvain*, v. 3770 et ss) », *Cahiers de civilisation médiévale*, 30, 1987, p. 219-225を参照。
- 30) 「悪魔の2人息子」は作中で「人間の女性とネタンの子」(‘de fame et de netun furent’, v. 5275)だと説明されている。「ネタン」と呼ばれる神話的存在については, 拙稿「クレチアン・ド・トロワ作『イヴァン』の「ネタン」をめぐって—「海の怪物」神話の視点から」(篠田知和基編『神話・象徴・文化』楽浪書院, 2005年, 717-742頁)を参照。
- 31) 中世期の動物誌でペリカンはキリストの象徴として使われていたため, 『フロリヤン』に出てくる混成獣としての「ペリカン」(Pellican)の例は珍しい。
- 32) K. Busby, art. cit., pp. 274-276, およびシャンピヨン版 p. XXVI-XXVIIを参照。
- 33) 「食断ちのアーサー」というモチーフは, ダニエル・ボワリヨンによると, 『ジョフレ』や『リゴメールの驚異』に見つかる(前掲書『クレティアン・ド・トロワ全集』p. 1346, 『ベルスヴァル』p. 755への注2)。このモチーフはほかにも『ベルスヴァル第1続編』や『双剣の騎士』にも出てくる。
- 34) ウィリアムズ版 p. 26からの引用。
- 35) S. Strum-Maddox, “The Arthurian Romance in Sicily : *Floriant et Florete*”, *Conjointure arthurienne*, éd. par J. Dor, Louvain-la-Neuve, Université Catholique de Louvain, 2000, pp. 95-107.